
【Rabbit Zwei】

紗柚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【R a b b i t Z w e i】

【Nコード】

N 3 9 3 2 Q

【作者名】

紗柚

【あらすじ】

女性にしか反応しない兵器「インフィニット・ストラトス」の操縦者を育成する為の学校・IS学園。
そこでは世界各国から集められた少女たちが候補生として勉強に日々励んでいる。はずなのだが。
そんな中、幼い兔の物語が紡がれた。

【無謀にも、二作品目に手を着けてしまった紗柚です…。暖かく見守って下さい（汗）】

ブローグ

IS学園。

ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営及び資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。

ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は日本国にはない。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公平に介入し、協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務づける。

また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。

IS運営協定『IS操縦者育成機関について』の項より抜粋。

「ここがIS学園かあ……」
夜。

IS学園の正面ゲート前に、まだ幼い少年が立っていた。

少年は学園に入学出来る年ではないのだが…。

まだ暖かな四月の夜風になびく髪は、結んではおらず腰あたりまである。

少年の黒髪であるが所々に赤髪が混ざっていた。

「受付ってどこかなあ？」

少年はうさぎの耳が付いた薄手のパーカーのポケットから一枚の紙を取り出す。

「本校舎一階総合事務受付…。んー、わかんない」

少年は辺りを見回すが、それらしき建物を発見出来ない。

「お姉ちゃんに聞こう！」

それは名案だと、今度はおもむろに、携帯電話を取り出した。

「あ、お姉ちゃん？学園には着いたんだけど…。うん…。今？えつと…。？、正面ゲート前だよ。うん。じゃ、ここで待ってるね。」

少年は上機嫌で電話を切った。

今ここに、少年の物語はようやく始まりを迎えたのだった。

プロローグ（後書き）

感想等お待ちしております。

第一話

朝のホームルーム。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！」

「え……」

「「えええええっ！？」」

いきなりの転校生紹介にクラス中がいつきにざわついた。

三度の飯より噂好きの十代乙女、その情報網をいくぐったのだから。

そして、教室の扉が開かれた。

「失礼しま〜す」

クラスに入ってきた転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。

転校生は制服の上に薄手でうさ耳が付いたパーカーを着た、幼い少年だったのだから。

「日本生まれだけど、ドイツから来たの〜。織斑蓮って言うの〜。

十二歳だよ〜。千冬姉と一兄の弟なの〜。皆とは年は違うけど〜、よろしく、ね？」

蓮は最後に首を可愛く傾げた。

クラス全員があっけにとられた。

「お、男……？」

誰かがそうつぶやいた。

「そうだよ。千冬姉に呼ばれたの」

蓮は元気良かったがのんびりと答える。

千冬と一夏にどこことなく似ている顔。

因みに、蓮は公の場で千冬姉と呼んでも怒られないのは、織斑千冬が蓮を溺愛している、ただそれだけ。

一夏が公の場で言おうなら、間違いなく殴られる。

「きゃ……」

「??」

「きゃあああああ……っ!」

クラスの中心を起点にその歓喜の叫びはあっという間に伝播する。

「男子!二人目の男子!」

「しかもうちのクラス!」

「織斑先生と織斑君の弟で!」

「美形!可愛くて構ってあげたくなる系の!」

「それに守ってあげたくなる系!」

「地球に生まれて良かった!」

クラスの女子一同は元気だった。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬がぼやいた。

「いいかお前ら、蓮の面倒を見てやれ。もし蓮に何かあったら、どうなるかわかっているよな?」

「……はい!」

「織斑一夏、お前は特にだぞ」

「はい……」

「ではHRを終わる」

千冬がそう言い終わると、クラスの女子は蓮へと殺到した。

「い、一兄…助けて…」

「おう、無理だ」

一夏は即答で蓮を見捨てた。

「千冬姉に言うから…」

「そ、それは勘弁してくれ…」

蓮の言葉に一夏は慌てて助けに入る。

その後、授業が始まった。

毎回、授業後の休み時間には他のクラスの人達が蓮を一目見ようと殺到したが蓮の姿はクラスの女子に囲まれていた為、確認出来なかったらしい。

そして昼休みになった。

蓮は仲良くなつた布仏本音、一兄曰わく、のほほんさんと手を繋いで学食へと向かっていた。

「ねえねえ、のほほん」。学食って何が一番美味しいのかな、かな？」

「ん、おりむーはいつも日替わりランチなんだけど」

「一兄は毎日同じなんだ。僕も一兄と一緒にのやつにする」

「わかった。ちょっと待っててね。お姉ちゃんが持って来てあげる」

本音は蓮と別れ、学食のおばちゃんに注文しに行つた。

蓮は空いてる席を探しに行く。

すると、鈴を発見した。

「わあ、りんりん見つけ」

「ッ！？ゴボゴボッ！りんりんって言う…蓮!？」

鈴は大嫌いなあだ名を呼ばれ、慌てて振り返ると、そこには蓮がいて驚く。

「今日転校生してきたの。りんりん、そのラーメン一口ちょうだい」

「だから、りんりんって言うな！はあ…、はい、あゝん」

「あゝん。…りんりんって可愛いのに、駄目？」

「うつ！？」

蓮の言葉に鈴は顔を赤く染める。

そして逃げるように席を立った。

「じ、じゃあね蓮！」

「行っちゃった」

「蓮君、お待たせ」

入れ替わりのようにやってきた本音の手の中には、日替わりランチとサンドイッチがあった。

「あ、のほん。ありがと」

二人はのんびりと昼食を開始した。

午後の授業は特に何もなかった。

やはり、休み時間毎に他のクラスが詰めかけるのは変わらなかったが…。

それ以外は特にいつもと変わらない。

して言うなら、蓮がパーカーを被って寝ていたというだけだ。

その蓮の寝顔に夢中だったクラスメイト達が、千冬に出席簿で叩かれていた。

放課後。

「一兄、どこ行くの？」

蓮はチャイムと同時に目を覚ました。

すると、一夏がどこかへ向かう所だった。

「蓮か。俺は今からISの特訓なんだよ」

「へえ。面白そうだね」

「あのな…、二対一でボコボコにされるだけなんだぞ…」

一夏は、蓮の耳元まで近付いて周りに聞こえないように喋り出した。

「誰に？」

「箒とセシリア」

だが、無駄だった。

盗み聞きしていたらしいセシリアが近付いてきた。

「い、一夏さん、何か呼びまして？」

「誰？」

「お、おう。セシリア。セシリアの事を蓮に教えてやってたんだ」
自分の事だった為か、セシリアは顔を少し赤く染めた。

「…あなたも私を知らないの！？」

「うん」

「…セシリアは代表候補生なんだ」

蓮の言葉に不味いと思ったのか、一夏はすぐ耳元で教える。

「へえ」。セシリアって綺麗だけじゃなくて、凄いだね」

「き、綺麗！？」

「うん。セシリアは綺麗だよ」

えへへ、と笑う蓮の言葉にセシリアの顔は、真っ赤かだった。

「そんな、綺麗だなんて。一夏さん、先に行ってますね」

「あ、ああ」

セシリアは照れくさそうに、その場を離れた。

その光景を見ていたクラスメイト達は…、

「…あれが織斑家の末っ子か…。破壊力が違う…」

とか、思っただらしい。

「のほほん。遊ぼよ」

「えっ！？」

一夏と別れた蓮は本音を遊びに誘う。

当の本音は突然声をかけられてびっくりしていた。

「蓮君はどうやら本音に懐いたみたいだね」

「いいな。本音が羨ましい」

「織斑家の末っ子…、ものに出来れば先生はお姉様に…」

クラスメイト達が蓮には聞こえないように喋っているが、本音はそれどころではなかった。

「皆も一緒に遊ぼう」
「私にもチャンスあり？」
「本音から蓮君を奪い取るよ！」
蓮の誘いにクラスメイトほぼ全員が乗ったのだった。
寮に向かった蓮達は、本音の部屋でトランプなどをして遊ぶのだった。

現在七時。

一通り遊んだ蓮は、夕食を食べに食堂へと足を向けた。
そこで箸と一夏を発見する。

「箸ちゃん、見つけ！」

「ぶっ！？…れ、蓮か？」

箸は食べていたご飯を吐き出しそうになった。

「俺もいるんだけど…」

「一兄は…、どうでも良いかな」

「蓮、お前な…」

「箸ちゃん、箸ちゃん、この炒飯食べさせて」

「あ、ああ、良いぞ」

蓮は箸におねだりをする。

このおねだりは昔からなので箸は気にしない。

蓮は昔から、千冬、束、箸、鈴、他にも色々な人に食べさせてもらっていた。

特に千冬と束に…。

「蓮、いい加減自分で食べる」

「袖がこんなだから無理」

蓮はそう言つて手が出てない袖を見せた。

「…もしかして、昼も誰かに食べさせてもらったのか!？」

「のほほんに食べさせてもらったの」

「はあ…、まったく…」

一夏は頭を抱えた。

箒は一夏を横目に蓮に炒飯を食べさせて行く。

その手付きは慣れたものだった。

「蓮君は食べさせてもらわないと駄目なのか」

「良い情報ゲット!」

「逆光源氏作戦!これだ!」

「餌付けで…、うふふ…」

それを見た他の女子一同は羨ましがっていた。

「箒ちゃん、ありがとう。じゃ僕寝るから」

「ああ、蓮おやすみ」

「おい、蓮。お前部屋はどこだ?」

「僕?僕は千冬姉の部屋だよ」

「そ、そうか。おやすみ、蓮」

「おやすみ」

炒飯を食べさせてもらった蓮は食堂を後にしたのだった。

「織斑先生の部屋か…、流石に無理かなあ…」

「!逆なら大丈夫?」

「その案もらった!」

「ちよつと!？」

夕食後も女子達は元気だった…。

蓮が部屋に入ると千冬がいた。

「ただいま」

「蓮か、今日はどうだった？」

「今日はねえ、みんなでトランプしたの」

「そうか」

蓮は着替えてからベッドに向かう。

パジャマも、うさ耳付きだ。

「でねえ、お昼ご飯は、りんりにラーメン一口もらって、
のほほんに食べさせてもらったの」

「な、なんだと!？」

「夕食は箒ちゃんに食べさせてもらったよ」

「ば、馬鹿共が…」

「明日も楽しみ、千冬姉、おやすみ」

「ああ、おやすみ蓮」

そういうと蓮はスヤスヤと、寝息をたてて寝てしまった。

「お前は私が」

千冬は蓮の頭を撫でながら何かを呟いた。

その呟きは誰にも聞こえる事なく、消えたのだった。

扉の前では女生徒達が騒いでいた。

「わあ、蓮君パジャマもうさぎさんだあ…」

「ああ、可愛い」

「織斑先生の呟きは聞こえて!？」

「それは無理」

そんな声が千冬に届かない訳もなく、

「この馬鹿共が…」

「……あつ」「……」

部屋から出てきた千冬に叩かれるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3932q/>

【Rabbit Zwei】

2011年1月26日10時06分発行